

〈お茶の水女子大学「幼・保・大」連携保育研究の試み(37)〉

## 「クラーゲス輪読会」が与えてくれたもの

佐治 恵

### 「輪読会」という近づき方

お茶の水女子大学の幼保プロジェクト（「幼・保・大」連携研究プロジェクト）では、構成メンバーの教員が自由に展開する「自主ゼミ」を設けています。菊地知子・佐治由美子主宰の通称「クラーゲス輪読会」に時間があつたら出てみない？」と誘われたのは、輪読会も何回か進み、後半にさしかかるころでした。男性が一人加われば、ちょっと違った展開が期待できそうということだったのかもしれません。

テキストは二十世紀前半のドイツの民間学者ルートヴィヒ・クラーゲスの著書『リズムの本質』。原著は一九三三年にドイツで出版され、日本語訳は一九七一年に杉浦實訳でみずす書房から出版されました。黒・灰・白の四角い形が、さざ波が打ち寄せるように並ぶパウル・クレーの絵「律動的」が印象的に表紙を飾る本で、いまも書店で手に入ります。本文百ページ足らず、流し読みすればすぐに通過してしまうほどの小さな、しかし不思議な力をもつた書物です。

ずいぶん昔、学生のころ一度読んだことがあります。

内容はほとんど忘れて、読んだときの魅了された感覚だけは残っている本というものがあり、これは確かにそうした類の一冊でした。決して煽動的というわけではないのですが、読む者のからだの内側に直接訴えかけてくるような、情熱的な語り口なのです。

「自然は、宇宙のもつともはるかな星雲塊（やうずまき）から、極微のバクテリアあるいは原生動物にいたるまで、つねにすみずみまで形のととのった姿をしている。それを混乱させ、攢乱し、しばしばまったくの混沌状態に陥らせる仕事が人間のために残されていました！」（第二章、訳文は適宜変更しています）

たとえばこんなふう。一人で読むと「わかったようない気になってしまい」とタイプの典型的な本でしょう。「クラーゲス輪読会」に参加してすぐ気づいたのは、輪読会というやり方にはこういう「わかったつもり」

を防ぐ効用があるということでした。交替で音読しながら、途中で参加者（中心になるのは、保育周辺分野への関心を持続させ、目配りし続けている大学院生の人たちです）が自由に発言して自分の読み方を提示したり、疑問点を出したりしながら進める輪読会の場で、読み手は「ひとり読み」の危うさから守られ、また複数の参加者の読みを重ねることで一定の客觀性ないし公共性も確保されます。あらかじめ責任を負う報告者を立てて読み進めるゼミ形式に比べると、緻密さに欠ける弱点はあるかもしれません、全員で本文を追っていく輪読会には、報告を聞いただけで自分も読んだ気になってしまいのような危険を避けるという効果もあるでしょう。言つてみれば主觀的な思い込み（論語のことばを思い浮かべるなら「思ひて学ばざればすなわち殆（あや）しき」と、客觀的な思い込み（「学びて思わざればすなわち罔（よ）し」）の両方の危険からわが身を守ってくれる、なかなか効果的なアプローチなのでした。

## 「反復」と「更新」

過ぎ去ったものの更新を表すので、端的に『拍子は反復し、リズムは更新する』ということができる

（第六章）

さて、本書のテーマは「リズム」です。だれでも知っている、あの「リズム」というものです。日本語では「律動」、辞書的に言えば「規則的に繰り返される動き」のこと。幼児教育の場でも「音楽リズム」などのことばは日常的に使われているはずです。だれもがすでに熟知し、あたりまえに使いこなしていることばでしょう。ならばこの本は、「生活の中や教育の場にリズムを有効に取り入れよう」というような趣旨で書かれているのかと言えば、その予測はあつさりと裏切られます。クラーゲスはこの既知のことばに新鮮で大胆な接近を試みます。リズムは決して「規則的な繰り返し」などではないと。

「拍子が同一者の反復だとするならば、リズムは類似者の再帰だといわねばならない。類似者の再帰は

本書の核心部というべき箇所を縮めて引用しました。面食らわされる言い方ですが、ここでクラーゲスは人間のつくり出す拍子（タクト）と自然界に息づくリズムを対比して、両者は全く違うものだと強調するのです。人間が生み出す規則的な（たとえばメトロノームの）「拍子」は、機械でつくられたような生命力を欠いた「同じものの反復」をもたらすだけですが、自然界に息づく「リズム」は（前のものと似てはいるが）そのつど微妙に異なる、新たに生み出され、命を吹きこまれた「類似するものの更新」なのだというのです。辞書的な「規則的に繰り返される動き」というのとは全く違う、いやむしろ正反対の定義をガツンとぶつけられました。

「常識を疑うこと」、あるいは「未知の経験に対してもみずからを開き、受け入れること」。ものを考へるときの構えとして、哲学が求め続けてきたことです。それを文字通り遂行しているク萊ーゲスにならって、読む私たちも自分の「常識崩し」をしなければならないようです。

一見したところでは單なる繰り返しのように見えるけれど、実はいちいち新しい、一回一回に異なるものが到來してくる、やつてくる、という経験。この事態に対して、ク萊ーゲスはまるで初めて使うかのように、新鮮な気持ちで「リズム」ということばを名指し、あてがいました。私たちも新鮮な気持ちで「リズム」をもう一度自分のことばにしなければなりません。

## ガラス絵の経験から

何人かが集まつてテキストを讀んでいると、こういふときがおもしろいのです。みな難しそうな、わから

なそうな顔をしています。内容が難解だとか、文章が晦渺かげいだとかいうせいも多少はあるかもしれません。しかし、この「反復と更新」の箇所に出あつたときの参加者のようすは、単に処理しきれない難しいものにぶつかつた無力感のようなものとはひと味違う、何か手応えのあるものに向かつて手探りする姿のように見えました。

私の記憶では、このとき参加者はみな、まずは自分の中にはあつたこれまでの「リズム」のイメージを消し去ろうとしているようでした。自分でこうだと思つていたリズムの場面を頭から振り払い、次いでク萊ーゲスのことばにあつた「類似者の再帰」ないし「類似するものの更新」に該当する事態を探すのです。どうやら一人ひとり、それぞれの保育経験の場面をよみがえらせようとしているのでした。

ふとだれかが、ナーサリー（お茶の水女子大学附属いずみナーサリー）のガラス絵制作のことを話題にし

ました。透き通った大きなガラス窓に、だれかが水彩の具で何かを描く……、そこに別の子が重ねて描き加える……、保育者もちよつと手を出して反対側から手を入れてみる……。こうしてできあがったガラス絵は、紙に描いた絵とは違つて、おのずと共同制作の作品になります。

おもしろいのは、紙に描いた絵の上から重ね描きされれば怒る子たちが、ガラス絵では怒るどころか、自分の描いた線や塗った色が、ほかの人の手が加わることに上の層の線や色の下に隠されていくのを、むしろおもしろそうに見ていたというようです。単層では透明に見えたものが、幾重にも重複し、重層を成して色彩感を増していく、その変化のありさまを楽しんでいるのです。

これは一見、リズムとは無関係のことのように見えます。でも「類似するものの更新」、前のものと似てはいるが新たに生命を吹き込まれたかたちとしてのリズ

ムのあり方が、文字通りここに見られるのではないでしようか。ガラス絵が通常の絵画制作とは異なるところを与えてくれる理由は、それがリズムとして生命性を有しているからであるように思います。自分が初めて感受していたリズムが、ほかの人のリズムと重なつて、あるいは同調して「更新」され、「再帰」してくるのです。

### リズムは異質な世界をつなぐ

リズムは音や振動を通じて私たちの聴覚に訴えるとともに、さざ波のうち寄せや木の葉の葉脈の模様などを通じて視覚にもその運動を伝えます。前者は時間の中に現れるリズムであり、後者は空間の中に現れるリズムとして一応区別できるでしょう（第七章要約）。右のガラス絵の例などは、典型的に空間におけるリズムというわけです。

時間と空間とともにリズムが現れるということから、

少しこの本の記述を離れて考えてみます。ふつう私たちは、時間と空間は異なる次元にあり、両者を混同してはならないと考えます。クラーゲスは、そんなことはない、時間と空間は、実はひとつながりのもので、私たちもその間を自在に行き来してよいのだと言いたいようです。異質な世界をひとつにつなげているのが「リズム」なのだと。「リズム」に導かれて人は時間と空間を別のことではなく、一挙に感じうるのだと。

時間と空間だけでなく、音と色、熱さと重さなどの感覚対象の次元でも、また、聴覚と視覚、嗅覚・味覚と触覚などの五感の機能の次元でも、一見バラバラのものをひとつにする働きをリズムはもつのです。異なる感覚をひとつに結びつけて、何かしら全体的なあるいは全身的な経験と言うべき事態が起こるとする、それを可能にさせている力、これを「リズム」と呼び換えたから逸脱するでしょうか。

語り合いの中で、ナーサリーの子どもたちの遊びの

ようすも話題になりました。ひとつずつ部屋の中で、いくつかのコーナーに分かれてそれぞれの遊びを遊んでいる子どもたちが、ふと気づくと別のコーナーをおとずれてそちらの遊びに入り込んでいる。自在に、たゆたうように、あちらとこちらの異なる世界が交換される（あるいは「交感する」と書いたほうが適切でしょうか）ようだ。

そのとき、部屋にはバラバラに過ごす子どもたちがいたのではなく、その「場」を貫く「リズム」によって、ひとつの全体となつた空間と時間の中に住まう子どもたちがいたのです。このリズムの力は、子どもと大人という異なる世界の住人の中にも両者を貫くように等しく働いています。この力の助けを借りて、子どもと大人はたがいに共有する世界を実現し、ひとつの経験を享有することができるのでないでしょうか。

（塾勤務・日曜哲学者）